チェンバロ

來澄 和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チェンバロ

【Ｎコード】
Ｎ１１１９Ｌ

【作者名】
來澄　和樹

【あらすじ】
桜並木の向こうに建つ古風な店
そこは着物美人の店長がいる夢占いの館
そこでバイトをすることになったオレは次から次へと不思議なことに巻き込まれて……
謎の店長や黒ずくめの双子の少女に翻弄されながら、隠していた異能を次第に露にしていく、ファンタジー・オカルトストーリー

フォルテピアノ・フリューゲルの過去と未来を描く、ファンタジー・オカルトショップストーリー、第三段！完結編！

序章

夢踊る世界
現つとの狭間で自由に飛び回り
逆さまも未来も見せる
不幸な主人公も幸福な他人も全て自分
全ては無意識の自己からのメッセージ
時には自己の力ではどうにもならないこともある
見てみぬふりをするかは自由
十人十色とはよく言ったもの
様々な感情を伴って、夜を支配する
忘れることもあれば、忘れられないこともある
記憶を処理するだけのことなのか
記憶か夢か、判別のつかないこともある
同じ夢でも違うものになることもある
この世界は複雑で、わかりにくい

普通に、知りたいだけなのに

夢占いの館と葬式の夢

暖かい風が吹く三月の中旬。温暖のせいか、今年の桜は開花が早いらしい

そんなことをニュースで聞いた

「京都行きてー」

誰に言うでもなく呟いて、オレはテレビのスイッチを切った

学校は終業式も終え、春休み。あー、宿題さえなければなぁ……

「京都みたいな所に行けるわよ」

大学生の姉が何やら言い出した

「はぁ？」

「春休みにごろごろして……バイトでもしたら？」

「バイト？」

「友達がバイトの子探してるんだけど、私は他のバイトしてるし、無理そうなんだよねー。だから代わりに行ってきて」

「オレバイトなんかやったことねーし……」

「大丈夫よ。簡単な受付だって言ってたから。夢占いの館のね」

何か胡散臭いな

「店長は着物着てて、店も和風。近所には桜並木もあるんだって。時給も良いし、私の友達のとこだし。どうせ暇なんでしょ？」

「暇だけど」

「じゃ、宜しくね。連絡入れとくから。はい、住所と店の名前」

姉はオレに紙切れを渡して、どこかに出掛けて行ってしまった

「強引だなぁ……」

オレは手の中の紙切れを見た

「夢占いの館、チェンバロ……双子夢占い師、ララ、レミ」

チェンバロ……楽器か何かかな

「ま、いっか」

どうせ暇だし。見に行ってみるくらい

オレは紙にある住所をもとに、店を訪ねることにした

「夢占いか……」

桜並木を歩きながら、呟く

「最近夢ばっか見るんだよなー」

何か意味あるのかな？

とりあえず、店は……

「この辺のハズなんだけどな……ん？鈴？」

風に乗って聞こえてきた鈴の音。オレは音の方へと歩く

「和風な建物……ここかな？夢占いの館、チェンバロ」

道の先に現れた、古風な建物。看板には、夢占いの館、チェンバロと書かれていた

「来たわね」

「え？」

店先に立っていたのは、着物を来た黒髪美人。姉くらいの年に見える

「貴方が、店長さんですか？姉の紹介で来たんですけど」

綺麗な人だな。長い黒髪が和風っぽくて、着物に良く合ってる

「シンラくんね。お姉さんからは、あ、来た」

「？」

店長さんは震えているケータイを取り出し、電話に出た

「もしもし？あ、うん、弟くんね。はーい、ありがとー」

「？」

姉から？

「あ、ごめんごめん。今聞いたわ、キミが来ることは」

「え？」

「驚いた？私、キミが来ることは知ってたのよ。私はこのチェンバロの店長。普段は大学生。能力は夢による予知。宜しくね」

「よ……えぇー？！」

予知って何だ？何言ってるんだ？この人

「信じるかどうかは任せるよ。じゃ、とりあえず店に」

軽く話を流し、着物美人は店へと入って行く

オレは驚いたが、何故か彼女が嘘を吐いているとは思えなかった

「キミにはここの受付をして欲しいの。あの子達、そういうの向いてなくてね。会えばわかるわ」

「あの、受付って……」

「大丈夫よ。お客様が来たら、この用紙を渡して中にいる占い師に来客を告げる。用紙をお客様から預かり、占い師に渡す。お客様を案内して、終わったら会計。それだけよ」

「はぁ……」

用紙を見せてもらう。記入式で、名前や夢の内容を書くものだった

「うちの占い師を紹介するわね」

このカーテンの向こうに、双子の夢占い師が……

「え……」

「店長、この者は？」

「さっき、言った、受付の、人？」

カーテンの向こうには、黒ずくめの双子がいた

しかし、どう見ても小学生なんだけど

「うちの占い師だよ。向かって右が姉のララ。左が妹のレミ」

「我がララだ」

「レミ、です。宜しく」

に、似すぎ……区別つけられない

「ほら、シンラくん」

「あ、オレはシンラです。宜しく」

「二人は愛想がないからねー。受付には向いてなくって。で、キミを雇うってことよ」

「はぁ……」

確かに、さっきからニコリともしないな

「シンラ……」

「シン、ラ」

二人はそっくりな声で、綺麗な鈴のような声で、それぞれオレの名前を呟く

やっぱり区別つかねー

「ま、仲良くやってね」

「店長、受付、しない、何、する？」

レミちゃんが店長さんに問い掛ける

左にいる子だから、レミちゃんだよな

「私？私は、ちょっと忙しくてー。あんまりお店来れないかもだしー」

「そう……」

前は店長さんが受付やってたのか

「あの、オレ採用ですか？」

「勿論。バイトは学校終わりに直接来ても良いし、来られる時で構わないわ。定休日はないし、店は昼から開けるし。ま、出来るだけ来てくれるとありがたいけど」

それで良いのか……

「あの、履歴書とか、研修とかは……」

「履歴書？あー、次来る時持って来て。研修はいらないいらない。簡単なんだから」

「あ、はい……」

ちょっと不安

「さ、じゃあ客として入っていらっしゃい。今から私がすることを、キミがこれからするの。不安なら私の仕事をよく見て覚えることね」

教えてくれないんだ

「一旦出て、入っていらっしゃい」

「はい」

何だか適当だなー、なんて思いながらオレは店を出る

それから鈴の付いた引き戸に手を掛け、オレは中に入った

「ようこそ。夢占いの館、チェンバロへ」

先程までとは違う、静かな、しかし凛とした響きのある声音で、店長は客であるオレを迎えてくれた

「そちらにおかけになって、こちらの用紙に必要事項の記入をお願いします」

「あ、はい」

入ってすぐの部屋には、こじんまりした木のテーブルとイスが並べられている。オレは渡された用紙とペンを持ってイスに座り、用紙にペンを走らせた

ちら、と店長を見やれば、丁度カーテンの向こうから出て来た所で

そうか、今の間に二人の所に行くんだな、なんて確認をした

「書けました」

「それでは用紙をお預かり致します。準備が出来次第、案内させて頂きますので、少々お待ち下さい」

「はい」

あー、オレちゃんと敬語使えるかな？

店長が用紙を持ってカーテンの向こうへと消えるのを見送り、オレはイスの背もたれにもたれかかった

「ま、慣れれば何とかなるかな？」

「お客様、お待たせ致しました」

カーテンが開き、店長が現れる

「どうぞ、中へ」

「はい」

店長に促され、オレは歩を進める。カーテンの向こうには、黒ずくめの二人がテーブルの向こうに座っていた

明かりは仄暗く、雰囲気が出ている

「こん、にちは。どうぞ、座って」

レミちゃんがイスを勧めてくれる。店長はこの部屋には入って来なかった

二人と向かい合い座る

何だか緊張するなー

だってこの二人全然笑わないから、ちょっと怖いし。よく見れば、ララちゃんはずっと真顔。レミちゃんはずっと無表情だ

言葉にもそれぞれ特徴あるし、結構見分けられるかも

「シンラ、さん。お葬式、夢、見ます、か？」

「うん。最近見た中では一番気になってる」

「そう、ですか。どんな、感じ、ですか？誰、お葬式、ですか？」

「うーん……いや、それがお葬式って場面になって、そこで起きちゃうから」

「葬式には悪いイメージがあるかもしれぬが、実際はそうではない。この夢は、シンラが人生の転換期にいることを示している」

ずっと黙っていたララちゃんが口を開いた

「今までの己と別れることを意味するものだ」

「別れる……？それって、どういう……」

「案ずるな。新たな出発ということだ」

ララちゃん、もっと良いように言ってよ……ドキッとするなー

「近々シンラに、大きな環境の変化があるだろう」

「新しい出発、か。今までの自分との別れ、ね……。ま、心配するような夢じゃないってことだよな」

「何れ答えは出る。気にするようなことであるか、そうでないかは、な」

ララちゃん、不気味に微笑まないで下さい

「大きな、出来事、ある、はず」

「しかし、慌てることはない。恐らくシンラにとって、悪くはない転換期のはずだ」

「夢は、自分自身、からの」

「メッセージだ」

「忘れ、ないで」

夢は、自分からのメッセージ、か

何か不思議な気分だな

「他に、質問、は？」

「ないよ。ありがとう」

「どう、いたしまして」

「ならば入り口へ」

オレは立ち上がり、軽く会釈してから踵を返した

カーテンを開けると、少し眩しく感じた

「終わられたようですね。それでは、お会計の方、お願い致します」

「あ、はい」

「とまぁ、こんなカンジで会計をして」

「……」

今この瞬間、この人のスイッチが切れたんだな

「ありがとうございました。それでは良い夢が訪れますよう……」

店長は営業スマイルで頭を下げ、引き戸を引いた。スイッチが入っている

オレは無言のまま店を出た

「と、こんなカンジよ。簡単でしょ？」

スイッチが切れた……

いや、そんなことより接客の仕方覚えなきゃ

「簡単とは言いません。普通の店とは違うし」

言いながら再び店の中へ入る

「すぐ慣れるって。大丈夫大丈夫」

「……」

何て楽天的な人なんだ……

「お疲れ、様、シンラ、さん」

「励むのだな、シンラ」

カーテンが開き、二人が出てくる

何て言うか、不思議な子達だな……

「あ、そうだ。店長、お客さんが来た時と、用紙を書いてもらった後にカーテンの向こうに行くじゃないですか、あれって何してるんですか？」

「ん？あー、えっとね、お客様が来た時は来客があったことを伝えるだけ」

それだけか

「で、用紙を書いてもらった後は、その用紙を預かり二人の所に行く」

「二人に用紙を渡せば良いんですね？」

「違うわ」

「え？」

違うのか？

「渡すだけじゃ、書いてもらった意味がないもの」

意味がわからない

「シンラ、さん。私達、は」

「文字が読めぬ」

「……え？」

文字が、読めない？

「因みに、書く事も出来ないのよ」

そ、そうですか

「だから、用紙に書いてある内容を教えてあげてね。ここ、重要ポイント」

人差し指を立て、楽しそうにウインクする店長

オレは思ったことを口にした

「用紙をなくして、全部直接聞いたら良いんじゃ……」

「……」

黙る店長

「後で、記録、残せない。どんな、夢、どんな、人、来たか、書けない」

「そ、そうよ！記録を書かないといけないからね。だから用紙が必要なのよ」

……今、レミちゃんに助けられたな、この人

「記録って、どんなのですか？」

「年代別の来客数とか、どんな悩みで来られたとか。時々来る雑誌の取材では、そういうデータを提示してるの」

「へー。雑誌にも載るんだ」

「結構お客様来るわよ？楽できるとか思ってないわよね？！」

あはは……

「あ、そうそう。仕事中の服装だけど、私服で良いから出来るだけ黒い服で宜しく。あ、何ならー、着物でも良いけど」

「え？」

「うん、それが良いわ！そうしましょう！私が用意しておくわ」

「あの、店長？」

「きーまりっ！早速買いに行かなくっちゃ」

えー……

「いや、どうせなら一緒に行った方が良いわよね！うん！」

「え？あの、ちょっ」

「さ、行くわよ！」

ぐいぐいと腕を引かれ、されるがままのオレ

「頑張、って、シンラ、さん」

「検討を祈る、シンラ」

無表情で手を振るレミちゃんと真顔で腕を組んでいるララちゃん

しかし、憐れなものを見るような目で見られていると感じるのは気のせいだろうか

つか、助けて

店長、力あるな……

「何色が似合うかしら？今から楽しみね！」

黄色い声が降ってくるのを苦笑しながら聞き、オレは抵抗するのを諦めた

無理だと悟った

「あの、店長」

「ん？」

「店長の名前、聞いてないんですけど」

オレのその言葉に店長は立ち止まり、不適に笑んでみせた

そして人差し指を唇の前に立て

「内緒」

と言った

オレは思わず淡い苦笑を浮かべる

「内緒ですか」

「そ、内緒」

何がおかしいんだかわからないけど、オレは、オレ達はクスクスと笑った

「シンラくんと同じよ」

刹那、凍り付く

「……はい」

何もかも見透かされているような気がした

オレは口端が上がるのを押さえられない

「シンラくん。ようこそ、チェンバロへ」

「はい」

「キミは、来るべくしてやってきた人間よ」

「そのようですね」

この人は、いや、あの店は本物だ

オレは高鳴る鼓動に期待しながら、足を進める

オレは確かに、新しい出発に出会った

夢か現つか幻か

それは吉か、凶なのか

見て視てみましょう、その夢を

貴方の知らない貴方を教えます

夢占いの館チェンバロ

能力と事故・地震の夢

雨の日の続く三月の下旬。雨上がりには空気が冷え、寒い

桜の開花の行方は如何に……！？

「なーんてな。キャラじゃないっての」

誰に言うでもなく呟いて、オレは桜並木を歩いていた

学校はまだ春休み。宿題って何だっけ？

そんな現実逃避をしながら、オレはバイト先へ向かっていた

大学生の姉に無理矢理押しつけられた、夢占いの館の受付のバイト

しかしオレは結構気に入っている

「飽きないよなー」

不思議な雰囲気の店。占い師からして、普通ではない

「こんにちはー」

店に着き、鈴の付いた引き戸を開ける

するとカーテンが開き、黒ずくめの少女が顔を出した

「おはよう、ございます、シンラ、さん」

「おはよう、えっと……レミちゃん」

「正解、です」

未だに双子を見分けるのは自信がない

二人が並んでいれば、わかるんだけどな

「ララちゃんは奥？店長は？」

「ララ、奥、で勉強、してる。あの人、いない」

「そっか。着替えてくるね」

「うん」

店の奥には幾つか部屋があり、オレはその一つを借りている。そこで仕事着に着替えるのだ

「最初は着れなかったけど、慣れたら何てことないな」

店長の趣味で、仕事着は和装。着物を着て受付業をするのだ

「やっぱり店長の趣味かな？」

着替えを済ませ、鏡に全身を映す

着物には詳しくないが、これは色無地という種類の和服らしい

中々高級そうな店で買っていたが、給料が減ったりしないだろうな……？

「そんなことないか。宣伝効果もあるらしいし」

和服少年が受付をやっているとか何とか触れ回る気らしい

あの魔女め

何を考えているんだか

「最近、店にもいないよなー」

毎日仕事に来ているが、全く会っていない

オレはぶつぶつ呟きながら、仕事場へ向かった

「レミちゃん、受付やっててくれたんだ」

「座ってた、だけ。誰も、来て、ない」

「そっか。ありがとう」

「どう、いたしまして」

オレが店へ向かうと、レミちゃんはオレの仕事場に座って、真っ直ぐ引き戸を見つめていた

しかし来客はなく、どことなく残念そうなレミちゃん

「ララちゃんって、何の勉強してるんだ？レミちゃんはしないのか？」

ちょっと暇なので無駄口をたたいてみる

「ララ、魔法、勉強してる」

「魔法？」

「私、使えない。勉強、しない」

魔法って、漫画とかアニメとかの、あの魔法？

「へ、へぇー。魔法、ね。じゃあレミちゃんは、何か別のことが出来たりとかするのかな？」

「出来る。私、降霊、術、得意」

「こ、降霊術？」

「そう、霊媒、体質。話、出来る」

霊感少女だった

「そう、なんだ」

異能集団ってカンジだな、この店……

「シンラ、さん、は？」

「え？」

「シンラ、さん、何、出来る？」

真っ直ぐに射抜く瞳。刹那、凍り付く

「……別に、皆みたいな大したことは出来ないよ」

にっこり微笑んだが、気持ち悪いくらいの嘘臭さだと思う

鏡が目の前にあれば、割っていたかもしれない

オレって役者にはなれないな

「……そう、言うなら、別に、いい」

レミちゃんはくるっと踵を返す

「部屋、戻る」

「うん。じゃあね」

「また、ね」

いつもの無表情な顔でそう言って、レミちゃんはカーテンの向こうに消えてしまった

「暇だなー」

休日は結構お客さんが来るけど、平日は中々暇だったりする。ま

ぁ、今は春休みだから、ちらほらとは客足もあるんだけど

「あのー……」

リンという鈴の音と共に、引き戸が動く

来客だ

「ようこそ。夢占いの館、チェンバロへ」

店長に倣い、静かな、しかし凛とした響きのある声音で、オレは入って来た二人組の女性を迎えた

「うわー、マジで着物来てるー」

「可愛いー」

くっ……既に話題の一部か

あの魔女め

「そちらにおかけになって、こちらの用紙に必要事項の記入をお願いします」

「あ、はい」

部屋にある、こじんまりした木のテーブルとイスへ案内する。二人は、渡された用紙とペンを持ってイスに座り、用紙にペンを走らせた

今のうちにオレはカーテンの向こうへと行く

「お客様来たよ」

「準備、する」

「宜しくね」

そう言い部屋に戻ると、丁度良いタイミングだったようだ

「あのー、書けたんですけど」

「それでは用紙をお預かり致します。準備が出来次第、案内させて頂きますので、少々お待ち下さい」

「はい」

会釈し、オレは再びカーテンの向こうへと向かう

そこには既に準備万端の双子がいた

「お客様は二十代の女性が二人。ミミさんとミソラさん。ミミさんの見た夢は、事故に遭う夢。ミソラさんの見た夢は、地震」

「わかった。二人の案内を」

「じゃあ連れてくる」

用紙の内容を話し終えたオレは、ララちゃんに促され部屋に戻った

「お客様、お待たせ致しました。どうぞ、中へ」

「はい」

オレは歩を進め、カーテンの向こうの部屋へ案内する。そこには、先程までと同じく、黒ずくめの二人がテーブルの向こうに座っていた

明かりは仄暗く、雰囲気が出ている

「こん、にちは。どうぞ、座って」

レミちゃんがイスを勧める。オレはカーテンの傍に立った

四人は、向かい合って座る

「凄い、噂通りだー」

「女の子の占い師さん」

一体どんな噂が流れているのか、知りたい

「ミミ、さん。事故、遭う、夢、見ます、か？」

「あ、はい。昨晩見て……結構リアルで怖くって」

「そう、ですか。どんな、感じ、ですか？事故、遭って、どう、なります、か？」

「えっと……バイクに乗ってて、トラックにぶつかりそうになって、避けるんだけど壁にぶつかる夢」

「事故の夢を見る者は、後ろめたい事や隠し事があり、そのことに対して己を責めている者だ」

ずっと黙っていたララちゃんが口を開いた

「隠し事か後ろめたい事……」

「そうだ」

「……」

思い当たる節があるのか、ミミさんは考え込む仕草をする

「リアルな夢だと言うていたが、気を付けたほうが良い」

「え？」

「本当、事故、遭うかも、しれない」

「危険が迫っている可能性はある。正夢だ。外出には気を付けることだな」

ミミさんが息を呑む気配が伝わってきた

実際に遭うって言われたら、なぁ……

「次に、ミソラ、さん。地震の夢、見ます、か？」

「うん。最近見た中では、一番気になってる」

「そう、ですか。どんな、感じ、ですか？どう、なります、か？」

「えっと……それが地震ってとこで目が覚めちゃって……」

「そう、ですか」

「地震の夢は、現在の状況が激変することを示している」

ララちゃんが解説を始めた

「地震は突然のものであり、人間の力ごときでは、どうにも出来ぬ。それと同じように、ミソラさんの力ではどうすることも出来ぬ力により、ミソラさんの立場は変化するだろう」

「変化？」

「今が良い立場なら悪くなる。その逆もまた然り」

「立場……」

「世の中、自分、の力、じゃ、どうにも、ならないこと、沢山、ある」

「しかし、事が起こった後は己の力で如何様にも変えていくことが出来るはずだ」

「夢は、自分自身、からの」

「メッセージだ」

「忘れ、ないで」

二人へ向けられた、二人からのアドバイス

二人はどう受け止めたのだろう

「他に、質問、は？」

首を横に振る二人

「ならば、入り口へ」

二人は立ち上がり、軽く会釈してから踵を返した

オレはカーテンを開け、二人を部屋へ促す

少し眩しく感じた

「それでは、お会計の方、お願い致します」

「あ、はい」

マニュアル通り、オレはお金を受け取る

「ありがとうございました。それでは良い夢が訪れますよう……」

オレは営業スマイルで頭を下げ、引き戸を引く

二人は軽く会釈をして、店を出た

「ふぅ……」

店に戻り、イスを綺麗に並べ直し、新しい用紙を用意したりと、準備を始めた。先程の用紙は、データとしてファイルした

「慣れたか、シンラ」

「ララちゃん」

カーテンが開き、ララちゃんが部屋へやってきた

「まぁね」

「評判のようだな、着物の受付」

「……みたいだね」

「何だ、不服か」

笑うと不気味なララちゃん

もうこっちも慣れた

「事故の夢って、何か怖そうだな」

「そう思うのか？あれは己の負を責める者の心がそうさせる。それに、実際に正夢になるとして、注意が出来るのだから良いと思うが……」

そうですか

「夢も凄いけど、やっぱりララちゃんとレミちゃん、凄いな」

「夢についてのデータを記憶しただけだ。シンラのように凄いことは出来ぬ」

「……え？」

一瞬耳を疑ったが、大丈夫、オレの耳は異常ない

「オレなんて別に……」

「そう言うなら別にいいが」

……こういうとこ、双子だよな

「隠す事でもないであろうに、不思議な男だ」

不思議な子に不思議と言われた

ララちゃんはそのままカーテンの向こうへ消えていく

彼女の背を見送り、オレは呟いた

「こんなの、あったって意味ないだろ」

しかしオレの呟きは風に乗り、誰の耳にも届くことはなかった

夢か現つか幻か

それは吉か、凶なのか

見て視てみましょう、その夢を

貴方の知らない貴方を教えます

夢占いの館チェンバロ

謎の女と泉の夢

相変わらず雨の日の続く四月の上旬。降ったりやんだり、憂鬱になるなー

桜は綺麗に咲いてるけどね

「花見行きてー」

とか言いながらオレが歩いているのは桜並木だったり

春休みはあと数日。仕方ないから真面目なオレは、最近宿題に手を付け始めている

真面目だったらもっと早くやってる、なんて非難は置いておき、オレはバイト先へ向かっていた

「こんにちはー」

店に着き、鈴の付いた引き戸を開ける

すると受付には、黒ずくめの少女が座っていた

「来たか、シンラ」

「おはよう、ララちゃん。受付やっててくれたんだ？」

「あぁ」

ララちゃんは相変わらずの真顔で頷いた

「レミちゃんは奥？店長は？」

「レミは店長と出掛けている。もう戻るだろう」

「そっか。オレ、着替えてくるね」

「あぁ」

店の奥のいつもの部屋へ向かう。そこにある仕事着である着物に着替え、鏡に全身を映した

うん、今日もオレは着物に着られている

そんなバカなことを考えながら、オレは仕事場へ向かった

「ララちゃん、ありがとう。代わるよ」

変わらず座ってくれていたララちゃんにお礼を言って、受付を代わる

「礼は不要だ。座っていただけだからな」

「うん、ありがとう」

「……不要だと言うのに。まぁ良い。後は頼んだ」

そう言って立ち上がり、踵を返すララちゃん

今、微かに笑った？

ララちゃんはカーテンの向こうへと姿を消してしまった

いつも真顔だからわからないけど、ちょっとは仲良くなれたのかな？

そんなことを考えていると、背後で鈴の音が鳴った。オレは、反射的に振り返る

「やほー、シンラくん。ちゃんと仕事してるー？この給料ドロボーめ」

「ウインクしながら何てこと言うんですか！」

振り返れば、着物を着た魔女がとんでもないことを言いながらウインクしていた

大学生にもなって、ウインクしながら片足上げるなよ

「ただいま、シンラ、さん」

「おかえり、レミちゃん。お客さんはまだ来てないよ」

「そう」

「ちょっとー、軽く無視されてないー？」

口を尖らせ、店長が不貞腐れていた

「オレは真面目に働いているバイトです」
「やっだー。お茶目な冗談根に持っちゃってー」
店長が言って良い冗談かよ
「シンラ、さん、給料ドロボーって、何？シンラ、さん、ドロボー？」
「ほら、レミちゃんが店長のせいでこんなこと言ってるじゃないですか」
「レミ、給料ドロボーってのはね」
「あ、何普通に教えようとしてんですか！」
「何って、ちゃんと教えとかないとシンラくんが給料ドロボーだってわからないでしょ？」
「何言ってんだ、あんた！」
ムキになるオレだった
「さ、冗談はさておきー。レミ」
相変わらずの飄々とした態度で、ひらりとオレの怒りをかわす店長
「何？」
「さっきのことは忘れなさい」

「わかった」

「それと、シンラくん」

「はい」

仕事の顔になった店長に、オレの怒りは消えていた。オレの気も引き締まる

「今日はちょっと違う来客があるけど、いつも通りでね。私は奥にいるから」

「はい……」

ちょっと違うお客さんって、何だろう？

「お客様が来たら、私にも知らせてね。じゃあ宜しくー」

ひらひらと手を振って、店長はカーテンの向こうへと行ってしまった

「じゃあ、私も、向こう、行ってる」

「あ、うん」

レミちゃんも行ってしまい、オレは一人になった

「嵐が通り過ぎたってカンジだな」

オレはカーテンを見つめながら、そう呟いた

受付のイスに座りながら、オレは本を読んでいた

着物着て読書なんて、何か凄いな、オレ

いや、何が凄いかと言われたら答えられないけど

「なーんて、一人問答」

ここで受付を始めてから、何冊の本を読んだだろうか

それだけ暇だということなんだけど

「お客さん、来ないな」

なんて言っていると、リンという鈴の音と共に、引き戸が動いた

来客だ

「ようこそ。夢占いの館、チェンバロへ」

静かな、しかし凛とした響きのある声音で、オレは入って来た女性を迎えた

金髪でゴスロリファッションの女性は、オレをまじまじと見つめてくる

「あははっ、マジで着物着てるー。好きだねー、あいつも」

「……」

……笑い者か、オレは

「あははっ、ごめんねー。怒った？ね、店長いる？あたし、知り合いなんだけど。あ、でも客だよ。占ってほしーんだ、あたし」

スゲー人だな

「そちらにおかけになって、お待ち下さい。それから、こちらの用紙に必要事項の記入をお願いします」

「はいはーい」

部屋にある、こじんまりした木のテーブルとイスへ案内する。テンションの高い女性は、渡された用紙とペンを持ってイスに座り、用紙にペンを走らせた

今のうちにオレはカーテンの向こうへと行く

「お客様来たよ。店長の知り合いだって」

「準備、する」

「あと、店長にも知らせてくれる？」

「わかった」

「宜しくね」

そう言い部屋に戻ると、丁度良いタイミングだったようだ

「書けたよーん」

よーんて……

「それでは用紙をお預かり致します。準備が出来次第、案内させて頂きますので、少々お待ち下さい」

「はいよー」

会釈し、オレは再びカーテンの向こうへと向かう

そこには既に準備万端の双子がいた

「お客様は十代の女性が一人……え、十代？」

用紙を見たオレは思わず固まってしまった

あの人、十代なの？

「シンラ？」

「あ、ごめん。えっと、名前はドレミさん。見た夢は、泉の夢」

凄い名前だな

「わかった。案内を」

「うん、連れてくる」

用紙の内容を話し終えたオレは、ララちゃんに促され部屋に戻った

「お客様、お待たせ致しました。どうぞ、中へ」

「おうよー」

元気の良い人だな

オレは歩を進め、カーテンの向こうの部屋へ案内する。そこには、先程までと同じく、黒ずくめの二人がテーブルの向こうに座っていた

明かりは仄暗く、雰囲気が出ている

「こん、にちは。どうぞ、座って」

レミちゃんがイスを勧める。オレはカーテンの傍に立った

三人は、向かい合って座る

「おっひさー、二人とも。相変わらず表情無いねー。んー？」

「久しいな、ドレミ」

三人は知り合いなんだ？ま、店長の知り合いだし、当たり前か

「ドレミ、さん。泉、夢、見ます、か？」

「うん。昨晩見た」

何か凄い軽いノリの人だな……

「そう、ですか。どんな、感じ、ですか?泉、溢れて、ました?枯れて、ました?」

「うーんとね、枯れてはなかったよー」

「泉の夢を見た者は、欲しているものを手に入れる可能性がある」

ララちゃんが解説を始めた

「お、マジで?」

嬉しそうなドレミさん

「泉のイメージは湧き出ることだ。ドレミの欲しているものが、近づいて来ているのであろう」

「なるほどねー。枯れてたら、逆ってわけだ」

「大切なもの、身近に、あるの」

「失う前に大事にすることだな」

「ん、了解っ。ご忠告サンキュー」

「他に、質問、は?」

「無いよん」

「ならば、奥へ。店長が待っている」

それを聞いたドレミさんは立ち上がり、奥の部屋へと続く通路へ歩いた

「ありがと、二人とも。じゃ、ちょっと行って来るよん」

ドレミさんは、そのまま歩いていってしまった

「あの人、何者？」

「店長の知り合いだ。確か、妖怪晴れ女とか呼んでいたか」

「は？」

妖怪晴れ女？

ララちゃん、真顔で何言ってんの？

「店長、そう呼んでた」

「そう、なんだ……」

「ドレミは店長をイカレ魔女と呼んでいたぞ」

オレは思わず吹いてしまった

やっぱり魔女だったか……！

「汚い、シンラ、さん」
「……ごめん」
レミちゃんに言われると結構キツいな……
「ドレミさんって、何歳なんだ？」
二十代だと思ってたんだけど
「確か……高校を卒業したとか」
「え？！オレの一つ上？！」
一年しか違わなかった
「はー……ぶっ飛んでんな……」
「何か飛ばすの？シンラくん」
「あははっ、ペットボトルロケット？」
ええ、飛ばしたいですよ、貴方達を
「もう、お話、終わった？」
「うん、終わったよー」
「というわけで、お客様がお帰りよ、シンラくん」

「あ、はい」

「ふーん……シンラって言うんだ？」

「？」

来店時同様、まじまじと見られ、オレは困惑する

「ドレミ、今日は客でしょ」

「はいはーい」

「さ、シンラくんもお会計してきて」

「あ、はい」

オレは店長とドレミさんと三人でカーテンの向こうへと向かう

仄暗い部屋にずっといたせいか、カーテンの向こうはやけに眩しかった

「それでは、お会計の方、お願い致します」

「はいよー」

マニュアル通り、オレはお金を受け取る

「ありがとうございました。それでは良い夢が訪れますよう……」

オレは営業スマイルで頭を下げ、引き戸を引く

ドレミさんは後ろ手に手を振りながら、店を出ていった

「ふぅ……」

店に戻り、イスを綺麗に並べ直し、新しい用紙を用意したりと、準備を始めた。先程の用紙は、データとしてファイルした

「随分慣れたみたいね、シンラくん」

「はい」

そういえば、店長に会うのかなり久し振りだったんだっけ

「ドレミさん、妖怪晴れ女って聞きましたけど」

「あははっ、そうなのよ。あの妖怪ったら、外歩くと絶対晴れるのよ」

そういえば、雨やんでる……

「ありえないわよねー。屋内にいる間に降ったりして、外に出ようとすると必ず晴れるなんて」

「それで晴れ女……」

ある意味羨ましい話だ

「妖怪よ、絶対。占いする妖怪なんて、ズルいじゃない」

何がズルいんだろう？
「ドレミさんも占い師なんですか？」
「そうよ」
ゴスロリの占い師か……何か違うな
「因みに私も占い師よ」
「予言者じゃなかったんですか？」
「夢で予見はするけど、別に予言者じゃないわよ」
そうだったのか……
「タロットが得意よ。あの二人も得意だけどね。今度占ってあげようか？」
「……いえ、別にいいです」
「遠慮することないのに……シンラくんの力とは逆なんだし」
「……」
刹那、オレは言葉を失った。否、店長の瞳に宿った鋭い光が、オレから思考を奪ったのだ
「隠す事もないのに」

「……そんな大したもの、持ってませんよ」
「ふぅん？私達の前でそんなこと言っても、無駄なんだけどな……
ま、いいわ。いつか明らかになるんだから」
そう言って、店長はカーテンの向こうへと姿を消した
そんな彼女の背を見送り、オレは呟く
「それは予言か？ったく……笑えるぜ」
しかしオレの呟きは風に乗り、誰の耳にも届くことはなかった

夢か現つか幻か
それは吉か、凶なのか
見て視てみましょう、その夢を
貴方の知らない貴方を教えます
夢占いの館チェンバロ

危険な箱と痛い夢

ある晴れた日。オレは隣街の、とある一角に来ていた

目の前にあるのは一軒の店。まだ開店していないようだ

「そっちじゃないよー。こっちこっちー」

相変わらずの高いテンションでオレを呼ぶのは、金髪ゴスロリ女性、ドレミさん

この人、高校出て何やってるんだろう

そんなことを思いながら、オレは店長のおつかいでドレミさんの店へと向かった

三年に進級して、毎日勉強に追われるようになったが、オレは相変わらず放課後と休日には店に顔を出していた

今日も休日なので朝から店に行くと、店長におつかいを頼まれてしまった

「いやー、助かったよー。来てくれて。迷った?」

「いえ」

「何だー、つまんないのー」

何がつまらないんだろうか

オレはそんなことを思いながら、ただドレミさんの後についていく。と、彼女は先程の店の裏手に回って立ち止まった

「ドレミさん？」

「覚えてて、シンラくん。ここに貴方は十年後、訪れることになる」

「十年後？」

何だ？十年って……

それに、何だかドレミさんの雰囲気が変わった……？

「そう。ここにはこれから、フリューゲルという店が建つ」

「フリューゲル？」

「そのうちこの会話の意味がわかるよ。じゃ、次行こうかぁ！」

「……次？」

「そだよー。次ー、あたしの店ー」

この人、マジで意味わかんねー

調子もいつも通りだし

「さ、さくさく行くよー。あたしについてこーい」

そう言うと、ドレミさんは軽快な足取りで駅の方へ向かっていく

電車に乗るのかな？

「シンラくんはさ、十年後、自分が何してると思う？」

「十年後？」

二十七か……サラリーマンかな？

「働いてる、かな？結婚はしてなくても彼女はいて欲しいですね」

「ふーん。案外普通なこと言うんだー……そんな力持ってるのに」

オレは一瞬目を見開いた。あぁ、そうか。この人、あの魔女の知り合いだったな

何でわかるんだろ？

「こんなもの、使えるって言うんですか？それとも店長や貴方みたいに占いでもしろと？」

「したくないのに占いされてもー、迷惑ー」

語尾を伸ばしてキャハっと笑うドレミさん。それだけならムカつくんだけど……

振り返って目を細め、口端を吊り上げられちゃ、不気味すぎて言葉も出ない

一体、何を考えているんだか……

「さ、着いたよ」

「え？」

いつの間に？

この辺歩いたことあるけど、こんな場所あったか？確か駅に向かって歩いてたよな？オレ達

「この辺、道が入り組んでるからねー。慣れないと迷っちゃうよー」

「そう、なんですか」

「ようこそ、シンラくん。フォルテピアノへ」

「フォルテピアノ？」

「そ。もう数年後にはあたしの店じゃなくなっちゃうんだけど」

よくわからないが、とにかくここはドレミさんの店なんだな

「何の店なんですか？」

「いろいろやってるよん。占いもするしー、道具も売ってるしー」

「道具？」

店内に入りながら、オレは気になり訊ねた

「タロットカードや水晶玉、魔法具や呪具なんかもあるよー。これなんかどう？呪いのアイテムー」

ドレミさんが店内の棚に並んでいる商品から手に取ったのは、不気味な髑髏の付いた指輪で。所々に黒いシミが付いていた

「この黒いのって、錆びたんじゃ……」

「ないよ」

「ですよねー」

つか、んなもん要らねーよ！

「それより、店長に渡す物って何ですか？」

「あー」

あー、じゃねぇよ！今絶対忘れてただろ

「この箱。宜しくね」

そう言って差し出されたのは一つの小さな箱

「これを店長に？」

「そ、これよ」

「何なんですか？これ」

「箱よ」

んなの見りゃ誰だってわかんだよ

「そうじゃなくてですね……」

「あははっ、わかってるってー。お茶目な冗談」

この妖怪め……

「キミなら聞かなくてもわかるかもよ？」

「え？」

「ほら、持って持って」

ずい、と差し出された箱。オレは胡乱げにそろりと手を出した

「っ……！？」

瞬時、脳裏を駆け巡るイメージ。オレは目を見開いたまま、固まってしまっていた

「ふ、ふふふ……やっぱりね」

その声に我に返り、そろそろと目の前のドレミさんを見れば、彼女は不気味な笑顔でオレのことを見ていた

思わず息を呑む

「ど、れみさん……？」

「わかった？」

今度はにっこりといつもの笑みを浮かべたドレミさん。さっきとは別人みたいだ

「……箱の力が強くて、中身まではあまり」

「ふーん。ま、トレーニングしてない状態でそれだけ力使えたら、上出来ってか？きゃはは」

「……」

「ま、それ届けてねー。宜しくぅ」

「はぁ……」

「んじゃ、駅まで案内するよん。行こっかぁ」

オレはやっぱりドレミさんのテンションについていけないまま、箱を手に黙々と後をついていく。駅に着くと、彼女は用事があるとか何とか言ってどこかへ行ってしまった

今更だが、ドレミさんは今日も凄い服だった

「着いた着いた」

店の最寄り駅に着き、オレはホームに降りた。昼前のこの時間は、休日にも関わらず、人は殆どいなかった

「ん？」

電車は次の駅に向かって走りだす。オレは改札に向かって歩いていた

「……？」

何だか妙な感覚に襲われる。誰かに、見られている？

「誰もいないし」

きょろきょろと周りを見渡す。が、影すら見えなかった

「誰もいないのが逆に不気味？とか言ってみたり」

はは、と冗談を呟く。が、やっぱり妙に気になる感覚がある

具体的にどうかと聞かれれば、答えられないが

「ストーカーされるって、こんなカンジか？」

苦笑しながら神経を背後に集中させて、オレは駅を出る

その瞬間、オレは駆け出した

店まではそんなに遠くない。とりあえずあの店に行けば、解決す

るだろう

信号待ちで、仕方なく止まる。店まではもう少しなのに……！

息を整えながら、背後を窺った。駅にいた何かは、未だにそこにいた

いるだけで何もしてこない

「何なんだよ、あれ」

青になったのを確認して、オレは再び駆け出した

が

「……！？」

急にトラックが突っ込んできた。オレは箱を落としそうになりつつも、寸での所で避ける

「っぶねー……」

オレは心臓に手をあてがった。鼓動が激しく鳴り響いている

よろよろと立ち上がったオレは、その足でなんとか店へ向かうことが出来た

「ただ今、戻りました」

「おかえりー……あーあ、大丈夫？シンラくん」

店の引き戸の前で座り込んだオレに苦笑しながら、店長が近付いてくる

「お疲れ。さ、箱頂戴。そしたら消えるから」

そう言われ、オレはずいっと箱を差し出した。この箱を手にしていてオレに良いことはない。早く持っていってくれ

「うん、確かに」

「それ、何なんですか？一体何が入っているんですか？」

「あれ？視えなかった？触った時」

「箱の力が強くて、何も視えなかったんですよ」

そう言えば、店長はフフッと笑って、箱を開け始めた

「視えなかったんじゃなくて、何も視えないのよ。だってほら」

そう言って見せられた箱の中には、何も入っていなかった

「何もないもの」

「え？じゃあ、オレが運んだのは中身じゃなくて、箱？」

「そゆこと」

「……じゃあ何なんですか？その箱」

オレは何だか気が抜けて、不貞腐れた顔で店長に訊ねた

「封印具って所かな。魔法具の一種なの」

「そうですか。じゃあ、あのついてきてたのは何ですか？事故に遭いかけたのも、それのせいですか？」

「そうよ。あれは、そうね……この箱を狙っていた妖怪、みたいなものよ」

妖怪？

「もう、いないんですか？」

「いないわ。この店には結界が張ってあるし、それに私からは奪えない」

「奪えない？」

「この私から奪おうなんて、あんな雑魚が思うわけないわ……その前に消してやる」

そう言って、静かに口端を上げクスクス笑う店長は不気味で。オレは息を呑んだ

この人、たまにこういう顔するよな……ドレミさんもだけど

「さ、着替えていらっしゃい。仕事よ」

「あ、はい」

いつもの調子に戻った店長を横目に、オレは奥の部屋へ向かった

「何か疲れたなー」

着替え終わり、受付のイスに座る

と、リンという鈴の音と共に、引き戸が動いた

来客だ

「ようこそ。夢占いの館、チェンバロへ」

静かな、しかし凛とした響きのある声音で、オレは入って来た女性を迎えた

「そちらにおかけになって、こちらの用紙に必要事項の記入をお願いします」

「はい」

部屋にある、こじんまりした木のテーブルとイスへ案内する。女性は、渡された用紙とペンを持ってイスに座り、用紙にペンを走らせた

今のうちにオレはカーテンの向こうへと行く

「お客様来たよ」

「準備、する」

「宜しくね」

そう言い部屋に戻ると、丁度良いタイミングだったようだ

「書けました」

「それでは用紙をお預かり致します。準備が出来次第、案内させて頂きますので、少々お待ち下さい」

「はい」

会釈し、オレは再びカーテンの向こうへと向かう

そこには既に準備万端の双子がいた

「お客様は十代の女性が一人。名前はララミさん。見た夢は、足が痛む夢」

「わかった。案内を」

「じゃあ連れてくる」

用紙の内容を話し終えたオレは、ララちゃんに促され部屋に戻った

「お客様、お待たせ致しました。どうぞ、中へ」

「はい」

オレは歩を進め、カーテンの向こうの部屋へ案内する。そこには、先程までと同じく、黒ずくめの二人がテーブルの向こうに座っていた

明かりは仄暗く、雰囲気が出ている

「こん、にちは。どうぞ、座って」

レミちゃんがイスを勧める。オレはカーテンの傍に立った

三人は、向かい合って座る

「ララミ、さん。痛い、夢、見ます、か？」

「はい。左足の膝が凄く痛くなる夢で……病院に行こうか迷っているんですけど……」

「そう、ですか。足、病気は、ありますか？普段、よく、使い、ますか？」

「いえ、病気はないです。足は陸上部なので使いますね」

「痛い夢を見る者は、ストレスや不安、苦痛を感じている者だ。物事を悪い方へ考えてしまう傾向がある者でもある」

ずっと黙っていたララちゃんが口を開いた

「不安や苦痛を……」

「そうだ」

「……」

「それから、気を付けたほうが良い」

「え？」

「痛い所、病気、隠れてるかも、しれない」

「実際に怪我をする可能性もある」

ララミさんが息を呑む気配が伝わってきた

陸上部に足の怪我は、なぁ……

「プラス、思考、心掛けて。怪我、気を付けて」

「……はい」

「夢は、自分自身、からの」

「メッセージだ」

「忘れ、ないで」

ララミさんへ向けられた、二人からのアドバイス

彼女はどう受け止めたのだろう

「他に、質問、は？」

「ないです」

「ならば、入り口へ」

ララミさんは立ち上がり、軽く会釈してから踵を返した

オレはカーテンを開け、二人を部屋へ促す

少し眩しく感じた

「それでは、お会計の方、お願い致します」

「あ、はい」

マニュアル通り、オレはお金を受け取る

「ありがとうございました。それでは良い夢が訪れますよう……」

オレは営業スマイルで頭を下げ、引き戸を引く

彼女は軽く会釈をして、店を出た

「ふぅ……」

店に戻り、イスを綺麗に並べ直し、新しい用紙を用意したりと、準備を始めた。先程の用紙は、データとしてファイルした

「妖怪、か……」

不思議なものに命を狙われたことを思い出して、オレは身震いした

「こんなこと、これっきりにしてくれよ？」

そんなことを呟きながら、オレは仕事をした

ドレミさんに案内された、二つの店と十年後の話をすっかり忘れて……

夢か現つか幻か

それは吉か、凶なのか

見て視てみましょう、その夢を

貴方の知らない貴方を教えます

夢占いの館チェンバロ

超能力と骸骨の夢

木々が緑色を増している頃、オレは桃色の絨毯の上を歩いていた

「桜も散ったな……」

そんなことを呟きながら、家の近所を歩く

「あ、シンラ兄ちゃん」

「ん？あぁ、ミラちゃんか。何してるんだ？」

近所に住んでいる、小学生の女の子、ミラちゃん

この子の父親は、警察関係者らしい

「お姉ちゃんとかくれんぼ」

「そっか。じゃあファラちゃんに見つからないようにな」

「うん」

このミラちゃんのお姉ちゃん、同じく小学生のファラちゃんは実はオレと同じ、能力を持っていてそれを隠している者だ

直接何かを聞いたわけじゃないが、以前転びそうになった彼女を支えた時に、触れて知った

オレは触れたものの情報を、知ることが出来るからだ

「あ、シンラさん。こんにちは」

「ファラちゃん、こんにちは」

「ミラ見ませんでした？今日はお父さんが早く帰ってきたから、もう帰ろうと思ってるんですけど」

しっかりした小学生だよなー

「あ、そうなんだ？さっきそこにいたよ？ミラちゃーん、帰るってさー」

「えー？」

不思議そうな顔をしながら出てくるミラちゃん。ファラちゃんの傍まで歩いていき、何かを話していた

「さて、と」

店に行こうと思っていたオレは、足をそちらに向ける

と、ファラちゃん達のお父さんに会った

「こんにちは」

「あ、どうも」

「どうかな？あの話。考えてくれたかい？」

「あー……あれ、ですね……でも自分にはそんなこと……」

この人にはある日オレの力がバレてしまった。それから、この力を貸してほしいと頼まれている

「そんなことはないさ。遠慮することもない。それとも自信がないのかい？」

「えぇ、まぁ……」

「お父さーん！」

ファラちゃんとミラちゃんが走ってくる

オレは頭を下げて、足を進めた

「あ、また考えておいてほしい！キミの力が必要なんだ」

後ろから聞こえる声に、オレは俯きながら歩いていった

「あっちぃ……」

店に向かいながら、オレは天気の良すぎる空を見上げて呟いた

「春ってこんな暑かったっけ……」

言わずにはいられない、この暑さ。この間まで防寒具で身を固めていたというのに……

「夏、もっと寄り道してから来いよ」

そんなオレの呟き虚しく、カラスが頭上を飛んでいった

「こんにちはー」

店に着き、鈴の付いた引き戸を開ける

何故かこの店は、少しひんやりしていて涼しい

「おはよう、ございます、シンラ、さん」

「あ、レミちゃん。おはよう」

相変わらず全身黒ずくめだが、暑くないのだろうか？何だか見てるこっちが暑くなる

「外、暑いですか？汗、かいてます、シンラさん」

「うん、暑かった。上着なんか着てくるんじゃなかったよ」

「あ、やっほー。元気ぃ？シンラくん」

「お、来たねー」

「店長にドレミさん」

カーテンが開いたかと思えば、ハイテンションの二人がそこにいた

相変わらずの着物魔女とゴスロリ妖怪だ

仲良いな、この二人

「オレ、着替えてきますね」

「まぁまぁ、んな急がなくっても良いんでない？」

「はい？」

「そーそー。ちょっとお姉さん達に付き合ってよ、少年」

そう言ってオレの背中を押す店長。行く先は店の奥にある部屋だ

「ちょっ、オレ仕事しに来たんですけど……」

「うんうん。真面目で結構。お姉さんは嬉しいよ」

何言ってんだ、魔女は

「いやぁ、働き者だねー。シンラくんは」

何頷いてんだ、妖怪

大体一人でも扱いに困るのに、こんなのが二人もいて相手出来るか！

「さ、座って座って」

店長に押されてやってきた部屋は、初めて入った部屋で。卓袱台

と座布団が置いてある和室だった

何なんだ？一体

つーか、卓袱台なんて初めて見たよ

怪訝に思いつつも、オレは座布団の上に座る。店長とドレミさんも卓袱台を囲むようにして、それぞれ座った

「一体何なんですか？」

「焦らない焦らない」

「焦ったって、良いことないよー？」

誰も焦ってなんか……

「仕方ないなー、もう。不貞腐れちゃって」

「可愛いなー、シンラくんは」

誰が可愛いんだか

「実はさー、一度じっくり話したかったんだよね」

「そーそー」

「話？」

「そーそー」

そーそー妖怪って呼ぶぞ?!

「キミの力と十年後について、ね」

「?!」

突然のその言葉に、オレは一瞬硬直してしまった

そして同時に思い出す、フリューゲルとフォルテピアノの店

二人は、黙ったままのオレに構わず、話を続けた

「覚えてる?この前案内したお店。十年後にって話したこと」

「はい」

「そう。なら良かった」

「シンラくんはあの二人の力、聞いたのよね」

あの二人……ララちゃんとレミちゃんか

「はい。レミちゃんから、話を」

「そう。なら、話は早いわ……シンラくん。私は十年後の夢を見たの」

「十年後の、夢?」

オレは店長の突然の話に、怪訝な顔をした

「私が夢で未来を見る力があるのは、知ってるわよね？」

あぁ、そんなこと言ってたな……

「夢で見る未来は、今すぐの未来かもしれない。明日かもしれない。一年後かもしれない……それは定かではないのよ」

「定かではないなら、どうしてそれが十年後の夢だとわかるんですか？」

「それはその夢の場にいた私達が、今の私達より十歳年取ってるんだもん」

だもん、て……

「その夢で私達は、ここではない店にいるの。ララとレミを引き離し、二つの店を建て、怪奇と呪いを扱って……。貴方は貴方で違うことをしている。そして十年後、再び出会うの」

二人を引き離し、怪奇に呪い、十年後……そんなこといきなり言われても

「全てはシンラくん、貴方から始まるの」

「え？」

「これから、キミと関係のある人間が店に関わってくることになる」

「シンラくんがこの店に来たことは、運命の輪を動かした」

「運命の、輪？」

「そう。タロットなんだけどね。キミが初めて来たあの日、運命の輪のカードが出たの」

そういえば、タロットするんだっけ、この人

「関係のある人間が関わってくるってのは、一体……」

「シンラくん、近くにキミのような力を持った人間、いるでしょ」

「力……」

「心当たり、あるわね？その子はこれから十年経つまでに、確実に店の店員になるわ。妹もよ」

あの、まだ小学生の二人が……？！

「その二人を軸に店は動きだす。ララとレミのためにも」

「二人の、ためにも？」

「キミの力が必要だよ」

「そろそろ、認めてあげてもいいんじゃない？その力」

「……」

オレは今、一体何を考えたら良いんだろう？

オレは、どうしろと言われている？

「オレの、力？」

「私とは逆の力……シンラくんは、どこまでその力を理解しているの？」

「……触れたものを、知る力……過去を見る力」

初めて口にしたこの力。何て表現をしたら良いか迷ったけど、間違ってはないと思う

今まで口にしなかったのは、隠していたこともあるし、それに口にすると認めたことになるから

でも今は変な気持ちだ。意外にあっさりと言葉が出たし、それにこの二人は既にオレの力を知っていたんだ

きっと、オレよりも詳しく

「やっと自分の口から言ったわね」

「なんだ、ちゃんとわかってるんじゃない。つまんないのー」

何がつまらないんだか

「シンラくんのは、超能力である透視ね」

「超能力……」

「そうよ。予知に限っては、私もそうかもしれないけど。シンラくんのは透視と過去視ね」

テレビで自分と同じような能力を持った人を見たことがあった

それは嬉しかったが、同時に奇異や猜疑の目で見られるのだということを知った

それから、余計に口を閉ざしてしまった

「その力、とある人にバレてるんでしょ？そして、頼られている」

「でも、シンラくんは迷っている」

「怖がらないで。大丈夫よ」

「その力がある意味を考えたことはある？」

意味？

「迷わないで。大丈夫だから」

「シンラくんの選択が私達に繋がってくるの」

「人は繋がる」

「それが生きているということなのだから」

生きているということ……何て壮大なスケールの話になっていっているのだろう

おかしいな、そんな雰囲気微塵もなかったのに

「さ、じゃあ仕事しましょうか」

「んじゃ、帰るわ。まったねー」

「はいよー」

「……」

ドレミさんはいつものテンションに戻り、部屋から出ていってしまった

切り替え早いな……

さっきまでの雰囲気どこ行ったよ

「さ、シンラくん、着替えて着替えて。もうすぐお客様来るわよ」

「それも予知ですか？」

「まぁね」

「じゃあ着替えてきますね」

「はいはーい」

店長もいつもの様子に戻っていた

本当に魔女と妖怪は似てるな……

そんなことを思いながら、着替えるためにいつもの部屋に向かう

オレは鏡に映った自分の顔を見て、口を閉ざした

一体、どんな顔をしてさっきの話を聞いていたんだろう

今と同じ、無表情なのだろうか？

「ま、いいや」

鏡に背を向け、歩きだす。お客さん、来るらしいし。早く行かないとな

入り口に向かっていると、鈴の音が聞こえた

オレは急いで入り口に向かう

「ようこそ。夢占いの館、チェンバロへ」

静かな、しかし凛とした響きのある声音で、オレは入って来た女性を迎えた

「あ、どうも」

「そちらにおかけになって、こちらの用紙に必要事項の記入をお願いします」

「あ、はい」

部屋にある、こじんまりした木のテーブルとイスへ案内する。二人は、渡された用紙とペンを持ってイスに座り、用紙にペンを走らせた

今のうちにオレはカーテンの向こうへと行く

「お客様来たよ」

「準備、する」

「宜しくね」

そう言い部屋に戻ると、丁度良いタイミングだったようだ

「あのー、書けたんですけど」

「それでは用紙をお預かり致します。準備が出来次第、案内させて頂きますので、少々お待ち下さい」

「はい」

会釈し、オレは再びカーテンの向こうへと向かう

そこには既に準備万端の双子がいた

「お客様は二十代の女性が一人。名前はランファさん。ランファさんの見た夢は、骸骨の夢」

「わかった。案内を」

「じゃあ連れてくる」

用紙の内容を話し終えたオレは、ララちゃんに促され部屋に戻った

「お客様、お待たせ致しました。どうぞ、中へ」

「はい」

オレは歩を進め、カーテンの向こうの部屋へ案内する。そこには、先程までと同じく、黒ずくめの二人がテーブルの向こうに座っていた

明かりは仄暗く、雰囲気が出ている

「こん、にちは。どうぞ、座って」

レミちゃんがイスを勧める。オレはカーテンの傍に立った

三人は、向かい合って座る

「ランファ、さん。骸骨の、夢、見ます、か？」

「あ、はい。夢に出て来て、怖くって……」

「そう、ですか。最近、疲れたり、してますか？」

「えっと……最近仕事は忙しい、かな。重要なこと任されて……」

「骸骨の夢を見る者は、労力を無駄に使用している可能性がある」

ずっと黙っていたララちゃんが口を開いた

「えっ……」

「その仕事、行き詰まっているのではないか？」

「……」

当たっているのか、ランファさんは視線を下げた

「それから、気を付けたほうが良い」

「え？」

「病気、なるかも、しれない」

「肉体的にしろ精神的にしろ、疲れておるのかもしれぬ」

ランファさんが驚きのあまり、口を開けたまま言葉を失っていた

「気持ち、切り替えて」

「見方、やり方を変えれば、効果はあるだろう」

「夢は、自分自身、からの」

「メッセージだ」

「忘れ、ないで」

彼女へ向けられた、二人からのアドバイス

ランファさんはどう受け止めたのだろう

「他に、質問、は？」

首を横に振るランファさん

「ならば、入り口へ」

ランファさんは立ち上がり、軽く会釈してから踵を返した

オレはカーテンを開け、彼女を部屋へ促す

少し眩しく感じた

「それでは、お会計の方、お願い致します」

「あ、はい」

マニュアル通り、オレはお金を受け取る

「ありがとうございました。それでは良い夢が訪れますよう……」

オレは営業スマイルで頭を下げ、引き戸を引く

蘭葉さんは軽く会釈をして、店を出た

「ふぅ……」

店に戻り、イスを綺麗に並べ直し、新しい用紙を用意したりと、準備を始めた。先程の用紙は、データとしてファイルした

「力、か……」

仕事前に聞いた話が、頭に浮かぶ

「迷わないで、か……」

怖がらないで、とも言っていたか

「何でもお見通しだよな……」

本当に大丈夫なんだろうか

逃げずに挑んでも

本当に大丈夫だというのか

「あの人達、それは嘘吐かないしな……よし」

オレは呟きながら、決意を固めていた

夢か現つか幻か

それは吉か、凶なのか

見て視てみましょう、その夢を

貴方の知らない貴方を教えます

夢占いの館チェンバロ

新しい店と十年越しの夢

初めてこの桜並木を歩いてから、早十年

ここには、チェンバロという店が建っていた

いや、今でも店は健在だが

夢占いの館なんて、一生関わることなんてないと思っていたんだけどな……

「十年か……あっという間というか、何というか」

「まだ二十代後半の青年が、何達観したような目で空き地見てんのよ」

「貴方もにやにやしながらそんなこと言わないで下さい」

振り返って、懐かしい顔に思わず笑みが零れる

やっぱり晴れたな

「ゴスロリはやめたんですか？」

「だってあっちが金髪ゴスロリなんだもん」

だもん、て……

「それは本当なら貴方が店長をするはずだったからじゃないですか。

店長は別にパクったわけじゃないですよ」
「わかってるわよ」
だったら不貞腐れるなよな
「ぶー」
昔は金髪ゴスロリだった妖怪も、今では黒髪で
なんと服装はスーツだ
まともな格好したら、まともに見えるもんなんだなー
「失礼なこと考えてないで、行くよ？」
心を読むなよ
「いざ、フリューゲルへ！」
「はい」
意気揚々と前進していくドレミさんに苦笑しながら、オレは彼女についていった
「シンラくんの知り合い、いるんだよね？」
「はい」

電車を降りて、店に向かいながら歩いていると、質問をされた
「両方の店にいるんでしょ？シンラくんが紹介したの？」
「あれ、そこまでは知らないんですか？」
「知らないから聞いてるんでしょ。私この十年、イギリスにいたのよ？」
外国で勉強してる、とは聞いていたけど、イギリスに十年もいたのか……
「フォルテピアノのファラちゃんは、いつの間にか店員になっていて驚きましたね。フリューゲルのミラちゃんは、オレの紹介ですよ」
「へぇー」
「お互い、同じような店に関わってることは知らないで働き始めたんですよ」
「ｉｎｔｅｒｅｓｔｉｎｇ。面白ーい、それ」
スゲー、発音
「ま、今はお互い知ってるらしいですけどね」
「ふーん」
「オレ、結構楽しみなんです。どんな能力者に会えるのか」

フリューゲルの子は能力者じゃないって聞いたけど、フォルテピアノのメンバーは全員能力者。これは気になる！

「双子や店長も、全然会ってないの？」

「はい。ララちゃんとレミちゃん、変わったのかなー」

「二人のこと、知らないの？」

「え？」

「……そう」

何なんだろう？

「ドレミさんは、ちょっと変わりましたね」

「ま、十年も経てばね」

「見た目とかじゃなくて、性格が普通の人に見えます」

「それ、どういう意味かな？十年前は普通じゃなかったってか？ん？ん？」

あ、ヤベ……怒らせたかな？

「なーんてねー、ひっどーいシンラくん。普通に見えるの？やだー、普通なんてー」

「え……」

「普通は嫌ー」

唇尖らせて、半眼で駄々をこねる三十手前の女性

大人げないなー……

「あ、店が見えてきましたよ」

「おう、行くかぁ！」

前言撤回

この人、何も変わってないや

「はい、行きましょう」

オレは苦笑しながら、店へと足を踏み入れた

「シンラ……！」

「シンラ、さん！」

「うわっ！」

店のオフィスに入った瞬間だった

黒髪と茶髪の双子に抱きつかれたのだ

「もしかして、ララちゃんとレミちゃん？」

そう言えば、頷く二つの頭

二人とも、小さい……

「久し振り、二人とも」

そう言うと、二人の顔が上がった。そして見た二人の顔

初めて見た、二人の自然な笑顔

「っ……」

「あははー、びっくりしてるー」

「店長……」

思わず半眼になってしまう、楽しそうな笑い声が耳に届いた

「おっひさー、シンラくん」

本当にゴスロリだ……

人って服で雰囲気変わるものなんだなー

「やー、格好良くなっちゃってー」

「シンラ兄だー」

「何でシンラさんが？」
「店長、この人は？」
笑うミラちゃん、驚くファラちゃん、戸惑う店員達……ま、当然だな
つか店長、何も言ってないのか？
「初めまして。チェンバロのシンラです」
「チェンバロって、店長の店第一号の？！」
「夢占いの館の？！」
「じゃあオレ達の先輩なんだ？」
へー、チェンバロのことは知ってるんだ？
「何か特殊な力、持ってるんですか？」
ファラちゃんが真剣な顔で聞いてくる。変わらないな、この子も
あのアルトだと知った時はびっくりしたけど
「シンラくんは超能力者よ。貴方のお父さんの仕事の手伝いをしてるんでしょ？」
「手伝いって……だってシンラさんは警察の人だから、一緒に仕事してるんだとばかり……」

「今でこそ、勉強して試験受けて、この立場になったけど、最初は手伝いだったんだ。この透視能力を使ってね」

「透視、能力……」

驚きを隠せないファラちゃん。無理もないか。だってミラちゃんもお父さんも知っていて、自分だけ知らなかったんだもんな……

「それで？」

オレは店長に向き直る

「ん？」

「ん？じゃないですよ。フォルテピアノとフリューゲルとチェンバロの全員をこの場に集めて、何がしたいんですか？」

「あー、それね」

呑気だなー

「それに、ララちゃんとレミちゃんが一緒にいるのは良いんですか？」

「やっと、一緒にいられるようになったのよ」

「じゃあ、二人は十年振りに？」

二人ははにかみながら、頷く

「そっか……良かったな、二人とも」

「シンラくんは？仕事どうなの？」

「力も結構安定していて、上手くやっていけてますよ」

「そう」

「ね、シンラ兄、やっぱりあの二人は見た目イコール年齢じゃないんだ？」

ミラちゃんが興味津々で訊ねてくる

オレは苦笑した

「そうだな。十年前と全然変わってないよ」

「十年前から止まってるのよ」

ドレミさんが口を挟んできた。ずっと黙ってるから、立ったまま目を開けて寝てるのかと思ったよ

「シンラくんが会った時はまだ年相応だったけどね。丁度その頃から歪みが生じていた」

「だから二人を引き離し、それぞれの力が安定するように力を使える場所を作った」

「特に我の力、であろう？」

「ララ……」

「そうね。レミはララに影響を受けていたから、すぐに安定したわ。ララは負の力が強かったから……」

生まれつき黒魔法に長けていたララちゃん。家系的に力を持つ者は生まれていたが、その中でも二人は特殊で。そしてララちゃんは、またその中で異質だったらしい

だから、二人は家にいづらかった

だから、いとこである店長が連れ出した

だけど力のバランスが取れず、やむなく二人は引き離された

それが上手くいった。この十年で

だから、再び二人は一緒にいられるようになったんだ

「まるで呪いが解けるかのように、今二人の時間が動きだす」

「え？」

呪い？店長、急に何を……

「ドレミ、お願い」

「はーいよ」

ドレミさんが二人の前に立つ

「良い？二人とも」

その声に、二人は黙って頷く

「始めるよ」

目を閉じたドレミさんの周りは光を帯び始め、足元には魔方陣が現れていた

「ドレミはね、イギリスで魔法を習ってきたの」

「ま、ほう……？」

「二人の時間を回すために」

「……」

ドレミさんをよく見ていると、口元が僅かに動き、何かを呟いていることがわかった

皆、何も言わずただ目の前の光景を見守っている

オレもその一人だった

光は強くなり、双子を覆う

次第に二人は見えなくなってしまった

「大丈夫よ、そんな顔しなくても」

ふいに店長にそう言われた

オレ、どんな顔してたんだろう……

「あ……」

「だんだん出てきたぞ」

「ララちゃん、レミちゃん……」

光がだんだん引いていく。徐々に二人の姿が見えてきた

恐らく、二人は今十九、二十歳くらいだ

「……！」

「成功ね！」

「うわ……」

光が元に戻り、二人が目の前に現れた

そこには、ファラちゃんやミラちゃんと同じような年代の双子がいた

「……」

皆、言葉を失っている。オレも何も言えずにいた

「どう？二人とも」

「不思議な心持ちだ」

「うん、不思議……」

「すぐ慣れるわよ。さ、皆聞いて」

店長の言葉に、騒ついていた声が止んだ

「今月いっぱいでフォルテピアノ、フリューゲル両店は閉めることになりました」

「「えぇー？！」」

店員皆の声が異口同音に重なる

そりゃそうだ。オレだって開いた口が塞がらない

「閉めるって……」

「何で？」

「まぁ、聞きなさい。貴方達をクビになんてしないから」

その言葉に安堵を隠せないメンバー

面白いな、こいつら

「新しい店を建てます。そこで、皆で占いも怪奇も幸福も請け負うの」

「今までの、全てが集まった店……？」

「そうよ。だってもうララもレミも一緒にいられるんだもの」

何だか凄い店になりそうだな……

でも

「面白そうですね」

「でしょ？」

「店は何処に？」

「チェンバロが建ってた所よ。あの店、まだそのままにしておいたから」

それで未だに綺麗だったのか……

「店の名前は？」

ミラちゃんが目を輝かせて聞いている

確かにオレも気になる

「どうするつもりなの？チェンバロにフリューゲル、フォルテピアノでしょ？ハープシコードか、クラヴィーア、ピアノフォルテとか

？」

何やらドレミさんがカタカナを連ねていたようだが、オレの頭にはハテナしか浮かばなかった

「何なんですか？ハープシコードとかえっと、クラヴィーアって」

「クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテって聞いたことある？」

「あ……ピアノ？」

「せいかーい、ソラくん。さっすがー」

ソラと呼ばれた少年は、照れたようにはにかんだ

「そ。簡単に言えば、全部ピアノを指す昔の名称ってわけ」

「へー」

「で？名前どうするの？名前は大事よー。ね、言霊使いさん」

ドレミさんがファラちゃんにウインクをする

ウインクって、この人……

「そうなのよねー。クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテじゃ長いし……」

長すぎるわ……！

「ま、考えておくわ。他に質問は？」

皆首を横に振った

「ないようね。じゃ、各々自由にどうぞ。お互い初めての人もいるだろうし、仲良くなっておいてね。あと少しの間、それぞれの店を宜しく！」

「「はい」」

「じゃー自由行動ー開始ー。んじゃ、シンラくんも行っといでー」

「えっ、うわっ……！」

店長に背を押され、後輩達の所へ近づく

振り返れば、店長もドレミさんもいなかった

「シンラ兄？」

「ごめん、ちょっと行ってくる」

オレは急いで店の外に出た

「あ……」

「あり？シンラくん」

「どしたの？」

「あ、いや……ドレミさん、帰るんですか？」
「帰るよー。何々？どした？もしかして寂しい？」
にやにやする彼女に、オレはしかし真剣な顔で言った
「はい」
「……シンラくん……大丈夫、また会えるから」
「……はい」
「うん、宜しい。じゃね、また来るわ」
「はいよーん」
ドレミさんが踵を返し、去っていく
オレは店長と二人で彼女の背を見送った

月日が巡り、桜並木の傍には新しい店が建った
いや、建物は前から建っていたんだけど
そこは密かに人気な占いの店
幸せを運ぶ石や小物。怪奇現象も相談出来るし、幸福の魔法も扱

っている

一番はやっぱり、よく当たるという双子の占い師が人気だ

そんな店の中はいつも賑やかで

オレはよく遊びに行ったりしている

そんな、非現実的で非日常な、退屈しない場所。魔法と占いの店、グランドピアノは、今日も何処かでひっそりと鈴の音を鳴らしています

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1119l/

チェンバロ

2010年10月10日10時47分発行